

宣教師の持ち込んだもの

19世紀前半、ニューイングランドからハワイにやって来た宣教師にとって、キリスト教化と文明化は実質的には同じものであり、ハワイ人のキリスト教への改宗は、未開の異教徒である彼らを「キリスト教文明」というより高位の文明へ引き上げることでもあった。会衆派のカルビン主義的教義は、原罪を負う人間は救済に向けて神の恩寵にあずかるしかなく、救済される者は予め定められているとする。さらに、神への義務として、また救済を約束するものとして、労働の価値が強調され、怠惰で安逸な生活は否定されるようになった。宣教師にとって改宗しなければならない未開の異教徒は常に「怠惰」であり、キリスト教化して労働の価値を教え、文明化しなければならない対象であったのである。

宣教師はハワイ人を救済するためにキリスト教を伝えようとしたのだが、彼らがハワイに持ち込んだのはキリスト教の教えだけではない。19世紀初頭のニューイングランドのカルビン主義的な文化、すなわち教義に根ざした彼らの価値観や行動様式もハワイに持ち込まれることになった。それは、「道徳」「規律」「勤勉」「節制」「平安」といった言葉に要約される文化コードと言って良いだろう。神に救済されるべき者として規律と節制をもって勤勉に労働に励み、聖書に示された道徳に従い、安息日を守って心の平安のうちに暮らすというのが、文明人たるキリスト教徒のあるべき姿だったのである。一方、反道徳的な行いに加えて、怠惰や安逸や娯楽などは、その対極にあるものとして否定された。

宣教師は、カフナの呪術やアウマクア信仰、さらにはフラやアヴァ（‘awa）の飲用など、ハワイの様々な伝統文化を異教的行為として禁じた。しかし、異端審問のようにキリスト教の教義において断じたというよりも、自分達にダンスやアルコールの飲用を禁じたのと同じ文化コードの中でハワイの伝統文化を禁じたと考える方が適切かもしれない。宣教師がキリスト教と共に持ち込んだ物品から技術や行動様式に至る様々な文化に通底していたのが、このカルビン主義的な文化コードであり、これこそが彼らが持ち込んだものの中で、識字文化と並んでハワイ人に最も影響を与えたものであった。

ホロクーとハワイアン・キルト

アロハシャツやムウムウを着たミュージシャンの演奏に合わせて、裾の長いハワイアンドレスを着たフラダンサーが踊るのをテレビ番組などで見たことがあるかもしれない。ドレスを着た女性ダンサーが淑やかな調べに合わせてフラを踊る姿は、ハワイと聞けばおそらく多くの日本人が思い浮かべるイメージの一つだろう。ハワイアン音楽、ムウムウ、裾の長いハワイアンドレスが、ハワイらしさを醸し出してくれるのだが、実はそのいずれもが19世紀の宣教師に由来するものなのである。

宣教師がハワイにやって来た時、ハワイ人女性はパーウ（pā‘ū）と呼ばれるカパ（樹皮布）でできた腰衣しか身に付けておらず、上半身は裸であった。“礼節”に欠ける容姿の島民女性を“文明化”するために宣教師が持ち込んだのが、ホロクー（holokū）と呼ばれるゆったりとした長袖のガウンである。宣教師の妻達の着ているドレスに魅了された王族女性が、そのふくよかな体型に合わせて仕立てさせたものがその始まりだ。こ

のドレスは王族女性の社会的地位を示す役目を果たし、宣教当初の改宗ターゲットでもあった彼女達は、宣教師の意になかった出で立ちで教会の礼拝式に出席した。

やがて西洋の物品が島社会全体に流通し出すと平民女性の間でもホロクーが着用されるようになる。このホロクーから、高い襟ぐり、ヨーク（上部の切り替え）、トレイン（長い裾）、長袖の部分が省略されたものが、よく知られたムウムウ（mu‘umu‘u）だ。ムウムウの原義は「手足を切断された」という意味で、ホロクーからヨークやトレインが省略されたドレスということからその名が付けられた。これらのドレスは、ハワイ人女性の身体を“文明化”し、「規律」や「慎み」といった価値観を導入する役割を果たした。

宣教師の持ち込んだものには、その他にキルトがある。宣教師の妻達は、端布を縫い合わせて作るパッチワーク・キルトをハワイ人女性に教えた。それは、女性の家事としてキルティングを指導し、「儉約」や「相互扶助」の精神を教えることを目的としていた。しかし、もとよりハワイには端布がなかったので、端布のパッチワークとは異なるキルティングの技術が独自に発展し、切り紙で作る花や雪の様に対称的に放射線状に広がる植物をモチーフとしたハワイアン・キルトが生まれた。

ハワイアン音楽

ハワイの伝統音楽は、音調の数が少ない詠唱形式のものであったが、欧米やアジアの音楽の影響を受け、メロディーに富んだ音楽が生まれた。このように誕生した“ハワイアン音楽”の定義は様々だが、宣教師の持ち込んだ賛美歌がその起源の一つとされる。多くの賛美歌がハワイ語に訳され、謹厳なニューイングランドの教会音楽が、合唱という歌唱スタイルと共に持ち込まれた。単調な旋律ではあるが、一人の歌い手が情感豊かに、時に激しく詠いあげるハワイの詠唱スタイルは、伝統文化が禁じられる中、「節度」と「調和」を重んじた厳かな賛美歌の合唱スタイルに取って代わられた。

例えば、ハワイ人の中で最も良く歌われる曲の一つで“Ku‘u One Hānau”（愛しき故郷）という名でも知られる“Hawai‘i Aloha”は、賛美歌“I Left It All with Jesus”のメロディーにカメハメハ4世の命でリヨン牧師が新たな歌詞を添えたものである。一方、ハワイ王国の国歌であり現在のハワイ州歌である“Hawai‘i Pono‘i”（ハワイの人民）は、カラーカウアが作詞し楽団指揮者ヘンリー・バーガーがプロシア賛歌を元に作曲した曲だ。

数年前、ケアリイ・レイシエルが「涙そうそう」をカバーした“Ka Nohona Pili Kai”（海辺の家）が話題になった。歌詞の内容が異なりメロディーも微妙に異なるが、聴けば「涙そうそう」のカバーであるとなぜか分かるこの曲も、19世紀の終わりから外来の様々な音楽を取り込んで発展してきたハワイアン音楽の伝統の中にあると言える。

ハワイ人をキリスト教化する過程で、宣教師の価値観が埋め込まれたモノとしてホロクー、キルト、賛美歌が持ち込まれた。ハワイ人はカルビン主義的な文化コードが埋め込まれたこれらのモノを自分たちのものとし、ホロクーもハワイアン・キルトもハワイアン音楽も今やハワイそのもの、彼らのアイデンティティを表すモノとして根付いている。